

A-34 老年期の食生活に関する研究(第4報)

その2 集団生活の老人(ホーム)2タイプ別

東筑紫短大 細身節子 磯 芳子 神原信子

目的 その1に続いてその2では集団生活の老人すなわち老人ホームで老年期をすごす場合には2つのタイプがある。老化はあるが特殊な疾病のない老人を対象とした養護老人ホーム、心身に障害のある老人を対象とした特別養護老人ホームの2つの集団生活を行なっている老人である。その食生活とその背景を調査し、老人の食物の嗜好、栄養状況などを通して健康に及ぼす影響を分析、検討を加えた。

方法 北九州市人口約100万の中で60才以上12万8000名、65才以上は8万7000名、うち在宅ねたきり老人約950名、一人ぐらし約6970名である。現在北九州市における老人ホーム入園可能人数はねたきり老人中の30~40%にすぎない。我々は養護老人ホーム(男19, 女48)特別養護老人ホーム(男19, 女43)の2タイプの集団生活を行なっている老人の食品摂取・栄養摂取などを調査し要因別に分析を行なった。分析方法は第3報に準じて変量分散を求め検定を行なった。

結果 食生活においては2タイプ間に食物摂取に対する意識内容の面で相違がみられた。要因別では家族構成の上から老人のみの場合が養護老人ホームに多く、特別養護老人ホームには家族をもつ老人が多い。老人の集団生活としてのホームが、食生活、健康面も含めて必要の増加を認めた。老人ホーム生活者の施設の拡充、さらに老人ホームの地域老人への開放など新しい試みが展開されることが今後の課題としてとりくみたいと思う。